



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

四旬節第5主日 C年 (2022年4月3日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 43章16—21節

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 3章8—14節

福音朗読：ヨハネによる福音書 8章1—11節

## あら 新たにされ、あゆみ出す人間

### 新しく生きる

今日の福音朗読はいわゆる「<sup>かんつう</sup>姦通の女」のお話です。ふと、この女性がどのように生きてきて、イエスさまと出会って、そしてどのように生き始めたのかを思い巡らしてみました。

姦通の現場を取り押さえられた女性はどんな人生を歩んできたのでしょうか。姦通とは<sup>こんいん</sup>婚姻関係から逸脱した異性との特別な関係、関わり合いのことを意味します。この女性は、誰か別の男性との深い間柄を生きていたのでしょうか。律法の規定では姦通を犯した人は、男も女も殺されました。「人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる」(レビ20章10節)。「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない」(申22章22節)とあります。この女は、いのちを賭けて逢瀬を重ねたとも言えます。もしかしたら、配偶者による支配、暴力から逃れるためだったかもしれません。あるいは、どうしようもない寂しさからの姦通だったのかもしれません。

今日の朗読箇所では律法学者たちやファリサイ派の人々は、イエスさまのもとに姦淫の現場で取り押さえた女性を連れてきました。しかし、もう一方の男性は連れてきませんでした。ここに、現代にも通じる女性の立場の弱さを感じます。

律法に従えば、姦通は石打の刑でした。石打の刑は「冒洗した男を宿営の外に連れ出し、冒洗の言葉を聞いた者全員が手を男の頭に置いてから、共同体全体が彼を石で打ち殺す」(レビ24章14節)とあるように、共同体の人が皆で石を投げて殺害しました。「死刑の執行に当たっ

ては、まず証人が手を下し、次に民が全員手を下す。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない」(申17章17節)ともあります。律法学者とファリサイ派の人々の質問は巧妙です。イエスさまが姦通の女を簡単にゆるしてしまうと律法に反することになります。もし、ゆるさなければイエスさまがこれまで語り続けてきた愛の教えが偽りになります。

当時、パレスチナ地方を支配していたローマ帝国は、ユダヤ人による死刑を禁止していました。ですから、石打の刑が実際になされていたかは不明です。そうしますと、社会の中に律法に反する姦通を行いながらも、刑を受けずに生きている人々がいたことになります。彼らは律法学者やファリサイ派の人々から見たら律法を守らない罪人でした。また、律法の遵守という足かせに苦しむ民衆から見ると彼らは軽蔑の対象でした。人々は、自分たちも律法を守っていないながらも、石打の刑に値する姦通をする男女は道徳的に墮落した存在とみなしたのです。この物語の女性は周囲の人から後ろ指を指されるような「日陰者」でした。そのことがますます不適切な異性との関係へと彼女をいざなったと思います。生きることにそのものに失望していたのでしょう。

イエスさまはこの女性に「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と語りかけます。イエスさまが語りかけるまでの間、つまり、イエスさまが身をかがめて地面になにかを書き続けている間、二人の間に濃密な時間が過ぎます。この女性は石打の刑にあうというあきらめの境地から、これまでの人生の歩みを振り返り、そして、イエスさまと二人だけで目を交わしながら、「罪に定めない」とことばをいただいたのです。

この後、この女性はどうのように生きたのでしょうか？ けっこう厳しい毎日が待っていたかもしれません。相変わらず周囲の人々は彼女のことを噂したでしょう。しかし、なんとか生きていこうという希望も彼女の中に生まれました。イエスさまの周りに彼女と同じようにゆるされ、癒やされ、救われた人々のグループがあったかもしれません。そんな人たちと一緒に生活を始めたかもしれません。イエスさまが語ったことば「これからは、もう罪を犯してはならない」を胸に秘めながら、第一朗読にあるように「昔のことを思いめぐらすな」と自分に言いかけながら新しく生きようとしたことでしょう。いずれ、この女性もまた、イエスさまの十字架上での死にめぐり逢っていきました。その時、自分が新しく生きるために、イエスさまが十字架上でいのちをささげたのだと感じたと思います。